

各関係機関・団体長 様

愛媛県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

このことについて、5月の予察情報を送付します。

病虫害発生予報（5月）

令和7年4月30日
愛 媛 県

1 予報の概要

作物名	病虫害名	発生量	その他
麦類	赤かび病	少	
水稻	いもち病 イネミズゾウムシ	やや少～並 —	発生時期：早
かんきつ	かいよう病 そうか病 ミカンハダニ アブラムシ類	やや少～並 やや少～並 やや少～並 並～やや多	
かき	炭疽病	並	
キウイフルーツ	かいよう病	—	発生注意
果樹共通	果樹カメムシ類	少	飛来時期：早
冬春トマト	灰色かび病	やや少～並	
冬春きゅうり （促成栽培）	べと病 褐斑病 うどんこ病 灰色かび病	並～やや多 並 並～やや多 やや少～並	
冬春きゅうり （半促成栽培）	べと病 褐斑病 うどんこ病 灰色かび病	やや少～並 やや多 並～やや多 やや少～並	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病 ハダニ類 アザミウマ類	少～やや少 少～やや少 並～やや多 並	
たまねぎ	べと病 ネギアザミウマ	少 少～やや少	
アブラナ科野菜全般	コナガ	並	
夏秋きゅうり	ミナミキイロアザミウマ	並～やや多	
夏秋なす	ミナミキイロアザミウマ	並～やや多	

2 気象予報（高松地方气象台）

1か月予報 4月24日発表（4月26日～5月25日）

〈1か月の平均気温・降水量・日照時間〉

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低20 並30 高50% 高い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

〈 予報のポイント 〉

- ・向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。
- ・高気圧に覆われやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

3 病害虫の発生予想

麦 類

(1) 赤かび病

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 4月以降の子のう胞子の飛散調査では西条市丹原町、松山市上難波とも飛散量は平年より少ない。

(イ) 4月下旬に行った裸麦の調査では、発生圃場率は0.73%（昨年65.6%）と低い。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 乳熟期以降気温が高く連続した降雨がある場合には、二次感染が起こり、発生が増加するため、追加防除を実施する。

(イ) トップジンM剤の使用回数は、大麦では出穂期以降1回以内、小麦では出穂期以降2回以内となっているため散布に際して注意する。

水 稻

(1) いもち病（育苗～本田初期）

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 現在、育苗期や移植後の早期水稻での発生は確認していない。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 健全種子を確保するため塩水選と種子消毒を行う。

(イ) 種子消毒にあたっては、薬剤の効果を発揮させるため、①乳剤以外の長時間浸漬では処理中に薬液を攪拌すること、②処理後は風乾し薬剤を十分付着させること、③浸種後2～3日間は水換えしないなど基本事項を遵守する。

(ウ) 苗いもち対策は、①有効薬剤の播種時処理、②覆土を十分行い播種した籾を露出させない、③育苗中の高温多湿を避ける、④発病の早期発見と薬剤処理による応急防除を実施する。

(エ) 本田では窒素質肥料の過用は避ける。

(オ) 育苗場所付近に雨ざらしの稲わらや籾殻を放置しない。

(カ) 置き苗は、移植後本田での葉いもちの伝染源になるので、圃場内外に放置しない。

(キ) 常発地や罹病性品種を植え付ける場合には、地域の防除暦に従い、本病に登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。

(2) イネミズゾウムシ

ア 予報の内容 発生時期：早

イ 予報の根拠

(ア) 現在、成虫の発生及び被害は確認していない。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、越冬成虫の本田への飛来時期は早まるとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 常発地では、本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理する。

(イ) 田植え後の深水を避け、浅水管理とする。

(ウ) 本虫に有効な育苗箱施用剤を処理していない圃場で発生量が多い場合には、本田防除を行う。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 伊予柑および甘平で2月に越冬病斑量を調査した結果、伊予柑では発生圃地率はやや少、発病度は少、甘平では発生圃地率、発病度ともに平年並の発生であった。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くも

のとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 夏秋梢などの罹病枝葉を除去し、病原菌密度を下げる。
- (イ) 強風による付傷は発病を助長するので、防風垣や防風ネットなどを整備する。
- (エ) 昨年度が多発園地や発芽前防除の未実施園地では、落弁期の薬剤防除を行う。
- (オ) 本病に対して感受性の高い品種（甘平、愛媛果試第48号等）では、防除を行う。

(2) そうか病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 常発地における3月の越冬病斑量調査では、過去9か年の結果と比較すると発病葉率、発病度ともに平年並の発生であった。
- (イ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病葉及び枝を除去する。
- (イ) 多発園地では落弁期の防除を実施する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、寄生葉率、1葉当たり雌成虫数ともにやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地内の早期発生樹で1葉当たりの雌成虫数が平均2～3頭に達した場合には防除する。
- (イ) 冬期の機械油乳剤を散布していない園地では、発生が早まるので注意する。
- (エ) 薬液は掛けむらのないように散布する。

(4) アブラムシ類

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 幼木や高接ぎ園では発生に注意し、発生初期に防除する。
- (イ) ユキヤナギアブラムシが寄生すると、葉が内側に巻き薬剤が付着しにくくなるので、丁寧に散布する。
- (エ) 一部地域の施設栽培園で、ワタアブラムシのネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているため、前年までに効果不足の事例があった施設では、これらの薬剤の使用は控える。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 3月の越冬病斑量調査の結果では、発生園地率、発病枝率ともに平年並の発生であった。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地内をこまめに観察し、越冬病斑がみられる結果母枝や5月下旬頃からみられる新梢の発病枝を除去する。
- (イ) 昨年、発生が多かった園地では新梢発育期に1～2回防除する。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

- (7) 発生園地における4月中旬の調査(品種:ヘイワード)では、昨年より1樹当たりの樹液漏出数は少なく、発病葉は認めていない。
- (イ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
 - (7) 新梢及び花蕾への重要な感染時期であり、特に強風雨により発病は著しく助長されるため、薬剤防除や防風対策を行う。
 - (イ) 園地見廻りによって、葉の斑点、花蕾の腐敗及び枝幹部からの樹液漏出痕や枝枯れ等の症状が確認された場合、周辺への拡散防止のため、発病部の早期除去を行う。
 - (ウ) 伐採は「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき、発病程度に応じて適切に対応する。
 - (エ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは、樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤で防除を行う。なお、銅水和剤については、開花直前～開花1週間後は受粉に影響があるので散布は避ける。

果樹共通

- (1) カメムシ類(うめ、もも、すもも、キウイフルーツ、なし、かき、かんきつ等)
 - ア 予報の内容 発生量:少 飛来時期:早
 - イ 予報の根拠
 - (7) 県下40か所で行った広葉樹落葉中のチャバネアオカメムシの越冬密度調査では、越冬は確認されなかった。
 - (イ) 県下5か所の集合フェロモントラップ調査では1か所で平年より多く、他は平年並、県下9か所の予察灯調査ではほとんどの場所で誘殺されていない(病虫害防除所ホームページ参照)。
 - (ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、飛来時期が早まる恐れがある。
 - ウ 防除上の注意
 - (7) 越冬成虫(7月頃まで生存)は、ヒノキ球果が成熟するまで、サクラ・キリなど餌植物を移動しながら果樹園へ飛来する。
 - (イ) もも、なしでは早めに袋掛けを終える。
 - (ウ) 果樹園への飛来は、曇天で夜温が高い日に多くなるため飛来に注意を払い、飛来が確認されたら防除を行う。
 - (エ) 山林から果樹園に飛来するため、山林に近い園地での被害が多い傾向にある。
 - (オ) カメムシ類の防除薬剤の多くは、カイガラムシ類やハダニ類に対してリサーチェンス(農薬散布による増殖)が起こりやすいので、散布後のカイガラムシ類やハダニ類の発生に注意する。

野菜

- (1) べと病(冬春きゅうり)
 - ア 予報の内容 発生量:促成栽培 並~やや多
発生量:半促成栽培 やや少~並
 - イ 予報の根拠
 - (7) 4月中旬の調査では、促成栽培はやや多、半促成栽培は発生を認めていない。
 - (イ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (7) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
 - (イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
 - (ウ) 老化葉はできるだけ除去し、圃場内の通風を図る。
 - (エ) 伝染源を減少させるため、多発葉を除去する。
 - (オ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏の菌叢までかかるよう散布する。また、病勢が進展している場合は、治療効果の高い薬剤を散布する。
- (2) 褐斑病(冬春きゅうり)
 - ア 予報の内容 発生量:促成栽培 並
発生量:半促成栽培 やや多
 - イ 予報の根拠
 - (7) 4月中旬の調査では、促成栽培は発生を認めておらず、半促成栽培はやや多の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
 - ウ 防除上の注意
 - (7) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
 - (イ) 草勢の低下、窒素肥料の過用は発病を助長するので適正な肥培管理に努める。
 - (ウ) 老化葉はできるだけ除去し圃場内の通風を図る。

(エ) 伝染源を減少させるため多発葉を除去する。

(3) うどんこ病 (冬春いちご、冬春きゅうり)

ア 予報の内容 冬春いちご 発生量：少～やや少
冬春きゅうり 発生量：促成栽培 並～やや多
冬春きゅうり 発生量：半促成栽培 並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、冬春いちごでは葉、果実ともにやや少、冬春きゅうりでは促成栽培、半促成栽培ともに発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生に冬春いちごではやや抑制的、冬春きゅうりではやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病葉・発病果や古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。

(イ) 薬剤散布に当たっては展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に薬液が付着するよう散布する。

(ウ) 冬春いちごでは、栽培終了時には株元を切断し、ハウスを閉め切るなどしてハウス外への孢子飛散を防止する。特に、育苗床に近接するハウスでは注意する。

(4) 灰色かび病 (冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご)

ア 予報の内容 冬春トマト 発生量：やや少～並
冬春きゅうり 発生量：促成栽培 やや少～並
冬春きゅうり 発生量：半促成栽培 やや少～並
冬春いちご 発生量：少～やや少

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、冬春トマトは平年並、冬春いちごはやや少の発生で、冬春きゅうりでは発生を認めていない。

(イ) 気象予報では、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。

(イ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な灌水や肥培管理に努める。

(ウ) 発病果や枯死茎葉は早めに除去する。

(5) ハダニ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場を観察して早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。また、同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含めローテーション使用を心掛ける。

(イ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。また、摘葉を行い、薬液が葉裏に十分かかるよう散布する。

(6) アザミウマ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、寄生花率はやや低く、1花当たり寄生虫数はやや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 花や幼果の寄生状況を観察し、寄生が認められたら早めに防除を行う。

(イ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

(7) ベと病 (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の定点調査では、発病株率は1.67% (平年 (8年間) 8.37%) と低い。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(7) 球の肥大期になると感受性が高まり、葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察を行い、発病初期に治療効果のある薬剤で防除を行う。

(8) ミナミキイロアザミウマ (夏秋きゅうり、夏秋なす)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(7) 4月中旬の調査では、冬春きゅうり (促成栽培) で、1葉当たりの寄生虫数は0.01頭 (平年0.08頭) で平年並、半促成栽培では発生を確認していない。

(4) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(7) 育苗期間中や定植時に、薬剤を処理する。

(4) 植物組織内部に産卵し、土中で蛹化するため、薬剤が直接かからない生育ステージがあり、発生を見たら3～7日間隔で2～3回防除する。

(7) きゅうりでは、本虫はメロン黄化えそウイルス (MYSV) を媒介するので注意する。

(9) ネギアザミウマ (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：少～やや少

イ 予報の根拠

(7) 4月中旬の調査では、1株当たりの成・幼虫数は0.10頭 (平年 (8年間) 2.14頭) で少ない。

(4) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(7) 食害により葉が白くかすり状となり、多発時には葉全体が白化するのでこれらの症状がある圃場では防除を行う。

(4) 圃場内外の雑草は発生源となるので除草する。

(10) コナガ (アブラナ科野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(7) 予察灯では6地点中2地点で多いが他では少なくなっており、性フェロモントラップでは2地点とも少ない (病虫害防除所ホームページ参照)。

(4) 気象予報では、気温は高い、降水量は平年並か少ないとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(7) 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

(4) 収穫残渣を早期に処分し、次世代の発生源を放置しない。

(7) ジアミド系殺虫剤 (IRACコード28) の効果低下事例が県下で確認されていることからこれらの薬剤の使用は控える。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。